

日蓮大聖人御書全集

おとごぜんごしょうそく

乙御前御消息

新版
1686
ゝ
1692

おとごぜんごしようそく

乙御前御消息

けんじがんねん

がつ にち

さい にちによう

おとごぜん

建治元年('75)

8月4日

54歳

日妙・乙御前

かんど

ぶつぼう

渡

そうら

とき

さんこう

ご

漢土にいまだ仏法のわたり候わざりし時は、三皇・五

てい

さんおう

ないしたいこうぼう

しゅうこうたん

ろうし

こうし

造

たま

帝・三王、乃至太公望・周公旦・老子・孔子つくらせ給い

そうら

ふみ

けい

名

てんとう

て候いし文を、あるいは経となづけ、あるいは典等となづ

ふみ

ひら

ひと

れいぎ

教

ふぼ

知

く。この文を披いて、人に礼儀をおしえ、父母をしらしめ、

おうしん

さだ

よ

治

ひと

随

てん

のうじゆ

王臣を定めて世をおさめしかば、人もしたがい、天も納受を

垂

たも

違

こ

ふこう

もの

もう

しん

たれ給う。これにたがいし子をば不孝の者と申し、臣をば

ぎやくしん

もの

とが

当

がつし

ぶつきよう

逆臣の者として失にあてられしほどに、月氏より仏経わた

とき

いちるい

もち

もう

いちるい

りし時、ある一類は「用うべからず」と申し、ある一類は

もち

もう

争

しゅつたい

めあ

「用うべし」と申せしほどに、あらそい出来して召し合

げてん

ものま

ぶつでしか

のち

せたりしかば、外典の者負けて仏弟子勝ちにき。その後は、

げてん

もの

ぶつでし

あ

こおり

ひ

解

外典の者と仏弟子を合わせしかば、氷の日にとくるがごと

ひ

みず

めつ

負

く火の水に滅するがごとく、まくるのみならず、なにと

もの

なき者となりしなり。

ぶつきようようや

渡

きた

ぶつきよう

なか

また仏経漸くわたり来りしほどに、仏経の中にまた

しょうれつ

せんじんそうら

しょうじようきよう

だいじようきよう

勝劣・浅深候いけり。いわゆる、小乗経・大乘経、

けんきよう

みつきよう

こんきよう

じつきよう

顕経・密経、権経・実経なり。

たと

いつさい

いし

こがね

たい

いつさい

こがね

おと

譬えば、一切の石は金に対すれば一切の金に劣れども、

こがね

なか

じゅうじゅう

いつさい

にんげん

こがね

えんぶだんごん

また金の中にも重々あり。一切の人間の金は閻浮檀金

およ

そうら

えんぶだんごん

ぼんてん

こがね

およ

には及び候わず、閻浮檀金は梵天の金には及ばざるがご

いつさいきよう

こがね

とく、一切経は金のごとくなれども、また勝劣・浅深あ

るなり。

しょうじようきよう

もう

きよう

せけん

しょうせん

小乗経と申す経は、世間の小船のごとく、わずかに

ひと

ににんさんにんとう

の

ひやくせんにん

の

人の二人三人等は乗すれども、百千人は乗せず。たとい

ににんさんにんとう

の

しがん

着

ひがん

ゆ

二人三人等は乗すれども、此岸につけて彼岸へは行きがた

少

もの

い

おお

もの

い

し。またすこしの物をば入るれども、大いなる物をば入れ

だいじよう

もう

たいせん

ひと

じゆう

にじゆうにん

の

うえ

がたし。大乘と申すは大船なり。人も十・二十人も乗る上、

おほ

もの

積

かまくら

筑

紫

陸

奥くに

至

大いなる物をもつみ、鎌倉よりつくし・みちの国へもいたる。

じつきよう

もう

か

たいせん

だいじようきよう

似

実経と申すは、また彼の大船の大乗経にはにるべくも

おほ

ちんぼう

積

ひやくせんにん乗

高

麗

なし。大いなる珍宝をもつみ、百千人のりて、こうらいな

渡

いちじようほけきよう

もう

きよう

んどへもわたりぬべし。一乘法華経と申す経も、またか

くのごとし。

だいばだった

もう

えんぶだいいち

だいいくにん

ほけきよう

提婆達多と申すは閻浮第一の大悪人なれども、法華経に

てんのうによらい

あじやせおう

もう

ちち

殺

して天王如来となりぬ。また阿闍世王と申せしは、父をころ

あくおう

ほけきよう

ざ

つら

いちげいっく

せし悪王なれども、法華経の座に列なりて一偈一句の

けちえんしゅ

りゅうによ

もう

じやたい

によにん

ほけきよう

結縁衆となりぬ。竜女と申せし蛇体の女人は、法華經を

もんじゆしりぼさつと

たま

ほとけ

成

文殊師利菩薩説き給いしかば仏になりぬ。

うえ

ぶつせつ

あくせまつぼう

とき

指

たま

まつだい

その上、仏説には「惡世末法」と時をささせ給いて、末代

なんによ

贈

たま

からふね

そうろう

の男女におくらせ給いぬ。これこそ唐船のごとくにて候

いちじようきよう

一乗經にてはおわしませ。

いっさいきよう

げてん

たい

いし

こがね

されば、一切經は、外典に対すれば、石と金とのごと

いっさい

だいじようきよう

けこんぎよう

だいにちきよう

かんぎよう

し。また一切の大乗經、いわゆる華嚴經・大日經・觀經・

あみだきよう

はんにやきようとう

もろもろ

きようぎよう

ほけきよう

たい

阿弥陀經・般若經等の諸の經々を法華經に対すれば、

ほたるび

にちがつ

かざん

ありづか

螢火と日月と、華山と蟻塚とのごとし。

きよう しようれつ

だいにちきよう いっさい しんごんし

経に勝劣あるのみならず、大日経の一切の真言師と

ほけきよう ぎようじや あ みず ひ 合 つゆ かぜ

法華経の行者とを合わすれば、水に火をあわせ、露と風と

あ いぬ しし 吠 はらわた 腐 しゆら

を合わするがごとし。犬は師子をほうれば腸くさる。修羅

にちりん いたてまつ こうべしちぶん わ いっさい しんごんし いぬ

は日輪を射奉れば頭七分に破る。一切の真言師は犬と

しゆら ほけきよう ぎようじや にちりん しし

修羅とのごとく、法華経の行者は日輪と師子とのごとし。

こおり にちりん い とき かた かね ひ

氷は、日輪の出でざる時は、堅きこと金のごとし。火は、

みず 無 とき 熱 くろがね 焼

水のなき時は、あつきこと鉄をやけるがごとし。しかれ

なつ ひ 合 けんぴよう 解 熱 ひ

ども、夏の日にあいぬれば堅氷のとけやすさ、あつき火の

みず 消 いっさい しんごんし けしき 尊

水にあいてきえやすさ。一切の真言師は、気色のとうとげ

さ、智慧のかしこげさ、日輪をみざる者の堅き氷をたのみ、

みず 見 もの ひ 恃

水をみざる者の火をたのめるがごとし。

とうせい ひとびと もうここく 見 とき 傲

当世の人々の蒙古国をみざりし時のおごりは、御覧あり

限 ころぞ じゆうがつ

しようにかぎりもなかりしぞかし。去年の十月よりは、

いちにん もの

一人もおごる者なし。

聞 にちれんいちにん もう

きこしめししように、日蓮一人ばかりこそ申せしが、よせ

来 おもて 合 ひと

てだにきたるほどならば、面をあわする人もあるべからず。

猿 いぬ 恐 蛙 へび

ただ、さるの犬をおそれ、かえるの蛇をおそるるがごとく

なるべし。

しやかぶつ

おんつか

ほけきよう

ぎようじや

これひとえに、釈迦仏の御使いたる法華經の行者を、

いっさい

しんごんし

ねんぶつしや

りつそうとう

憎

われ

そん

一切の真言師・念仏者・律僧等にくくませて、我と損じ、

てん

憎

被

くに

ゆえ

みなひとおくびよう

ことさらに天のにくまれをかぼれる国なる故に、皆人臆病

たと

ひ

みず

恐

き

かね

怖

きじ

になれるなり。譬えば、火が水をおそれ、木が金をおじ、雉

たか

見

たましい

うしな

鼠

ねこ

責

が鷹をみて魂を失い、ねずみが猫にせめらるるがごとし。

いちにん

助

もの

とき

たも

一人もたすかる者あるべからず。その時は、いかがせさせ給

うべき。

いくさ

だいしようぐん

たましい

たいしようぐん

臆

つわもの

軍には大將軍を魂とす。大將軍おくしぬれば、歩兵

おくびよう

によにん

おとこ

たましい

おとこ

によにんたましい

臆病なり。女人は夫を魂とす。夫なければ、女人魂

なし。この世に夫ある女人すら、世の中渡りがとうみえて

そうろう

たましい

よ わた

たも

たましい

によにん

候に、魂もなくして世を渡らせ給うが、魂ある女人に

勝

しんちゆう

うえ

かみ

こころ

い

もすぐれて心中かいがいしくおわする上、神にも心を入

ほとけ

崇

たま

ひと

すぐ

によにん

れ、仏をもあがめさせ給えば、人に勝れておわする女人な

り。

かまくら

そうら

とき

ねんぶつしやとう

そうら

ほけきよう

鎌倉に候いし時は、念仏者等はさておき候いぬ、法華経

しん

ひとびと

こころざし 有

無

し

そうら

を信ずる人々は、志あるもなきも知られ候わざりしか

ごかんき

被

さど

しま

なが

と

ども、御勘気をかぼりて佐渡の島まで流されしかば、問い

とぶら

ひと

によにん

おんみ

おんこころざし

訪う人もなかりしに、女人の御身としてかたがた御志

ありし上、我と来り給いしこと、うつつならざる不思議な
り。

その上、いまのもうで、また申すばかりなし。定めて神も

まぼらせ給い、十羅刹も御あわれみましますらん。

法華経は、女人の御ためには、暗きにともしび、海に船、

おそろしき所にはまぼりとなるべきよし、ちかわせ給えり。

羅什三蔵は法華経を渡し給いしかば、毘沙門天王は無量の

兵士をして葱嶺を送りしなり。道昭法師、野中にして

法華経をよみしかば、無量の虎来つて守護しき。これもま

た、彼にはかわるべからず。

ち さんじゅうろくぎ てん にじゅうはつしゆく 守 たも うえ ひと

地には三十六祇、天には二十八宿まぼらせ給う上、人に

かなら ふた てん かげ 添 そうろう

は必ず二つの天、影のごとくにそいて候。いわゆる、一

どうしようてん い に どうみようてん もう そう かた 添

をば同生天と云い、二をば同名天と申す。左右の肩にそい

ひと しゅご とが もの てん 過

て人を守護すれば、失なき者をば天もあやまつことなし。

ぜんにん

いわんや善人においてをや。

みようらくだいし 宣 かなら こころ かた よ

されば、妙楽大師のたまわく「必ず心の固きに仮つて、

かみ まも すなわ つよ とううんぬん ひと こころ 固 かみ 守

神の守り則ち強し」等云々。人の心かたければ、神のまぼ

かなら 強 そうら

り必ずつよしとこそ候え。

これは御ために申すぞ。おん もう 古の御心ざし申すばかりなし。いにしえ おんこころ もう

それよりも今一重強盛に御志あるべし。その時はいよいまいちじゅうごうじよう おんこころざし とき

いよ十羅刹女の御まぼりもつよかるべしとおぼすべし。じゅうらせつによ おん 守 強 思

例には他を引くべからず。日蓮をば、日本国の上一人よためし た ひ にちれん にほんこく かみいちにん

り下万民に至るまで一人もなくあやまたんとせしかども、しもばんみん いた いちにん 過

今までこうて候ことは、一人なれども心のつよき故なるいま そうろう いちにん こころ 強 ゆえ

べしとおぼすべし。思

一つ船に乗りぬれば、船頭のはかり事わるければ一同にひと ふね の せんどう 計 こと いちどう

船中の諸人損じ、また身つよき人も、心かいたければ多くせんちゆう しょにんそん み 強 ひと こころ おお

のう むよう

にほんこく

賢

ひとびと

の能も無用なり。日本国にはかしこき人々はあるらめども、

たいしよう

ごと

拙

甲斐

いき

つしま

くか

大将のはかり事つたなければかいなし。壱岐・対馬、九箇

こく

兵

なんによ

おお

殺

国のつわものならびに男女、多く、あるいはころされ、あ

捕

うみ

い

崖

落

るいはとらわれ、あるいは海に入り、あるいはがけよりおち

者

幾

千

万

こんど寄

しもの、いくせんまんということなし。また今度よせなば、

さき

似

きよう

かまくら

先にはなるべくもあるべからず、京と鎌倉とは、ただ

いき

つしま

さき

支度

壱岐・対馬のごとくなるべし。前にしたくして、いずくへ

逃

たま

とき

むかし

にちれん

み

き

もう

もにげさせ給え。その時は、昔、日蓮を見じ聞かじと申せ

ひとびと

たなごころ

合

ほけきよう

しん

ねんぶつしや

ぜんしゆう

し人々も、掌をあわせ、法華経を信ずべし。念仏者・禅宗

なんみようほうれんげきよう　もう

までも南無妙法蓮華經と申すべし。

ほけきよう　能　しん　なんによ

そもそも、法華經をよくよく信じたらん男女をば、肩に

担　せ　負　由　きようもん　み　そうろう　うえ

にない背におうべきよし、經文に見えて候上、

鳩　摩　羅　炎　さんぞう　もう　ひと　もくぞう　しゃか　負　たま

くまらえん三蔵と申せし人をば木像の釈迦おわせ給いて

そうら　にちれん　こうべ　だいかくせ　そん　替

候いしぞかし。日蓮が頭には大覚世尊かわらせ給いぬ。

むかし　いま　いちどう　おのおの　にちれん　だんな　ほとけ

昔と今と一同なり。各々は日蓮が檀那なり。いかでか仏に

成　たま

ならせ給わざるべき。

なん　たも　ほけきよう　敵

いかなる男をせさせ給うとも、法華經のかたきならば、

したが　たも

随い給うべからず。

いよいよ強盛の御志あるべし。

こおり みず

いよいよ強盛の御志あるべし。氷は水より出でたれ

みず

凄

あお

あい

い

ども、水よりもすすさまじ。青きことは藍より出でたれども、

重

あい

いろ 勝

おな

ほけきよう

かさぬれば藍よりも色まさる。同じ法華經にてはおわすれ

こころざし

たにん

いろ

りしよう

ども、志をかさぬれば、他人よりも色まさり、利生もあ

るべきなり。

き ひ 焼

せんだん き

ひ みず 消

木は火にやかるれども、梅檀の木はやけず。火は水にけさ

ほとけ

ねはん

ひ

はな

かぜ

散

じようご

るれども、仏の涅槃の火はきえず。華は風にちれども、浄居

はな

萎

みず

だいかんぼつ

う

こうが

い

の華はしぼまず。水は大旱魃に失すれども、黄河に入りぬ

う

れば失せず。

だんみらおう もう

あくおう

がつし

そう

くび

き

答

檀弥羅王と申せし悪王は、月氏の僧の頸を切りしにとが

ししそんじや

くび

き

とき

かたな

て

とも

なかりしかども、師子尊者の頸を切りし時、刀と手と共に

いちじ お

ほっしやみつたらおう

けいずまじ

や

とき

一時に落ちにき。弗沙密多羅王は鷄頭摩寺を焼きし時、

じゅうにじん

ぼう

頭

破

十二神の棒にこうべわれにき。

いま にほんこく

ひとびと

ほけきよう

敵

み

ほろ

今、日本国の人々は、法華經のかたきとなりて、身を亡ぼ

くに ほろ

もう

にちれん

じさん

こころ

し国を亡ぼしぬるなり。こう申せば、日蓮が自讃なりと心

得 ひと

もう

い

ほけきよう

えぬ人は申すなり。さにはあらず。これを云わずば、法華經

ぎようじや

い

こと

のち

合

ひと

しん

の行者にはあらず。また、云う事の後にあえばこそ人も信

書 置

みらい

ひと

ち

ずれ。こうただかきおきなばこそ、未来の人は智ありけり

知 そうら

とはしり候わんずれ。

み かる ほう おも み ころ ほう ひろ 述

また「身は軽く法は重し。身を死して法を弘む」とのべ

そうら み かる ひと う 張 にく ほう おも

て候えば、身は軽ければ人は打ちはり悪むとも、法は重け

かなら ひろ ほけきようひろ し かえ

れば必ず弘まるべし。法華經弘まるならば、死かばね還つ

おも 屍 おも いま はちまんだいぼさつ 斎 りしよう

て重くなるべし。かばね重くなるならば、このかばねは利生

りしよう とき にちれん くよう なんによ

あるべし。利生あるならば、今の八幡大菩薩といわわるる

斎 崇 思

ようにいわうべし。その時は、日蓮を供養せる男女は、

たけうち わかみや 崇

武内・若宮なんどのようにあがめらるべしとおぼしめせ。

いちにん もうもく 開 そうら くどく もう

そもそも、一人の盲目をあけて候わん功德すら申すばか

にほんこく

いつさいしゅじよう

まなこ

そうら

りなし。いわんや、日本国の一切衆生の眼をあけて候わ

くどく

いちえんぶだい

してんげ

ひと

まなこ

ん功德をや。いかにいわんや、一閻浮提・四天下の人の眼

癡

開

そうら

のしいたるをあけて候わんをや。

ほけきよう

だいし

い

ほとけめつど

のち

よ

ぎ

法華經の第四に云わく「仏滅度して後に、能くその義を

げ

もろもろ

てん

にん

せけん

まなこ

とううんぬん

ほけきよう

解せば、これ諸の天・人の世間の眼なり」等云々。法華經

たも

ひと

いつさいせけん

てん

にん

まなこ

と

そうろう

を持つ人は一切世間の天・人の眼なりと説かれて候。

にほんこく

ひと

にちれん

怨

そうろう

いつさいせけん

てん

にん

まなこ

日本国の人の日蓮をあだみ候は、一切世間の天・人の眼

挾

ひと

てん

怒

ひび

てんぺん

ち

をくじる人なり。されば、天もいかり日々に天変あり、地も

つきづき

ちよう

重

いかり月々に地天かさなる。

てん たいしやく

やかん うやま

ほう なら

いま きようしゆ

天の帝釈は、野干を敬つて法を習いしかば、今の教主

しやくそん

たま

せつせんだうじ

き し

いま さんがい

釈尊となり給い、雪山童子は、鬼を師とせしかば、今の三界

しゆ

だいしよう

しようにん

かたち

いや

ほう

す

の主となる。大聖・上人は形を賤しみて法を捨てざりけ

いま

にちれん

愚

やかん

き

おと

り。今、日蓮おろかなりとも、野干と鬼とに劣るべからず。

とうせい

ひと

たいしやく

せつせんだうじ

すぐ

当世の人いみじくとも、帝釈・雪山童子に勝るべからず。

にちれん

み

いや

ぎようごん

す

そうろうゆえ

くにすで

日蓮が身の賤しきについて巧言を捨てて候故に、国既に

ほろ

悲

にちれん

ふびん

もう

でし

亡びんとするかなしさよ。また、日蓮を不便と申しぬる弟子

助

難

歎

おほ

そうら

どもをもたすけがたからんことこそ、なげかしくは覚え候

え。

しゅつたい

そうら

おん

渡

いかなることゝ出来し候わば、これへ御わたりあるべ

みたてまつ

さんちゆう

とも

飢

じ

そうら

おと

し。見奉らん。山中にて共にうえ死にし候わん。また乙

ごぜん

大人

そうろう

賢

そうろう

御前こそおとなしくなりて候らめ。いかにさかしく候

もう

らん。またまた申すべし。

はちがつよつか

八月四日

にちれん

かおう

日蓮

花押

おとごぜん

乙御前へ